



## ( 6月議会 )

守りたい! あなたのいのち、生活を!!

発行) 宗像市議会議員 岡本陽子

自宅 福岡県宗像市自由ヶ丘 7-6-1

TEL/FAX (0940) 25-5344

ホームページ <http://www.okamoto-youko.jp/>

メール taiyoudaisukinayoko@gmail.com



ご意見・ご要望はホームページからも投稿できます。何でもお気軽にご相談下さい。

## 一般質問：災害時に実践対応できる災害対策を



本年4月に発生した熊本地震は、阪神淡路大震災級の地震規模マグニチュード7.3であり前例のない前震、本震という形態をとった。熊本市東区、福祉避難所においてのボランティア経験を通して感じた災害の実情も踏まえ、様々な視点から本市の災害対策が、災害発生時に実践対応できるものかを質問した。

**(広域での連携体制の強化を)** 熊本の被災地においては被災者が被災者を支援しなければならない場面に遭遇した。これは災害後長期にわたっての被災者の精神的ストレスとなることが考えられる。日頃から被災地以外の近県で支援体制、情報発信できる広域支援のしくみを作る必要性について市長に質問。現在東京都小平市との提携を結んでいるが、熊本地震の状況から精査して国、県との協議を行い現状にあった具体的対策を検討するとの答弁があった。

**(ボランティア受け入れに関してコーディネートす場所の設定が必要ではないか)** 宗像市地域防災計画に基づき、庁舎内での災害対策マニュアルは各課に設けられており、ボランティア対応は社協が中心となって行っているが、様々なボランティア内容、他自治体からの受け入れをする場合には、ボランティアのコーディネートをする場所が必要ではないかという質問に対して、災害という特殊な状況においては、ボランティアに関しても想定外の状況や対応が迫られることが予測。縦割りの弊害なくし各部所がさらに連携する必要があると答弁があった。

**(福祉避難所との連携、避難行動要支援者の避難訓練の実施などの状況について)** 福祉避難所の受け入れ人数を事前に決定しておくことは困難か、避難行動要支援者は名簿によって把握されているが、災害時に誰が責任をもちどこに誘導するかをイメージするためには避難訓練を実施することが必要ではないかとの質問に対して、要支援者に関しては、一度指定避難所に避難した後に、避難場所の振り分けをするしくみを作っている。災害時の支援者人数、福祉避難所の体制は想定できないため福祉避難所の事前避難人数の決定は困難であると答弁があった。

出会い

語らい

**◆想定外の福祉避難所の現状◆**

50名定員の利用者に対して100名を受け入れた福祉避難所。介護する職員も被災者であり、家が半壊、車中泊しながら介護に従事。このことから災害時に福祉避難所がうまく機能するための検討が必要だと感じた。

## 福祉避難所のお役に



### 福岡県の高齢者施設で汗

**熊本地震**

発生から2週間が経過した。今なお4万人近くが避難生活を余儀なくされる中、公明議員の岡本陽子・福岡県宗像市議と木村優子・同県粕屋町議は27日、看護師としての経験を生かし、老人ホームでの高齢者への支援ボランティアとして、被災地に入った。

福岡県を出発した両議員は、大型のトラックなどで渋滞する道を縫うように車を走らせ、熊本市東区の介護付有料老人ホーム「さすな」(梅田)に到着した。田せい子施設長(梅田)に到着。梅田施設長は「職員も被災した中、自宅の復旧作業もそこそこの懸命に働いているが、人手が足りない」と、窮状を語った。

早速、作業にとりかかった。両議員は、要介護の高齢者から8人が生活する部屋や共用スペースを清掃。その後、昼食の準備を手伝い、車いすでの生活する高齢者に食事の介助を行った。一人一人の噛む力など異なる特徴を押さえながら、優しく声を掛けていた。木村議員は、同ホームから歩いて5分ほど離れた「わらべ苑」へ。ここは、約50人の高齢者が入居するケアハウスで、福祉避難所としての機能を担う。14日の地震発生直後、100人を超える人が避難してきた。

避難者が身を寄せる談話室の清掃などに汗を流した木村議員は、施設で過ごす一人一人の健康状態に目を配った。そんな中、木村議員は90歳代男性の異変を察知。皮膚組織が壊れる褥瘡(床ずれ)の症状が出た。即座に施設職員と対応し、医療機関との連携を取ることができた。わらべ苑の梅田洋一・生活相談員は「私たちがだけでは気が付かなかった。本当に助かった」と、謝意を述べた。

ボランティア作業を終えた両議員は、引き続き被災地支援に取り組み決意を述べるとともに、「災害などの緊急時に福祉避難所を運営できる人員確保など、機能整備が喫緊の課題だ」と、口をそろえていた。

### 看護師経験生かしボランティア

生活する高齢者に食事の介助を行った。一人一人の噛む力など異なる特徴を押さえながら、優しく声を掛けていた。木村議員は、同ホームから歩いて5分ほど離れた「わらべ苑」へ。ここは、約50人の高齢者が入居するケアハウスで、福祉避難所としての機能を担う。14日の地震発生直後、100人を超える人が避難してきた。

避難者が身を寄せる談話室の清掃などに汗を流した木村議員は、施設で過ごす一人一人の健康状態に目を配った。そんな中、木村議員は90歳代男性の異変を察知。皮膚組織が壊れる褥瘡(床ずれ)の症状が出た。即座に施設職員と対応し、医療機関との連携を取ることができた。わらべ苑の梅田洋一・生活相談員は「私たちがだけでは気が付かなかった。本当に助かった」と、謝意を述べた。

ボランティア作業を終えた両議員は、引き続き被災地支援に取り組み決意を述べるとともに、「災害などの緊急時に福祉避難所を運営できる人員確保など、機能整備が喫緊の課題だ」と、口をそろえていた。